

三 ショートランド島（税所台）

私は運が強かったというか日本を出発以来敵の攻撃を受ける事もなく、ショートランド島まで何とか無事に到着し、ファイシーと云う出島の影にあるバンバシャイ基地の棧橋に上陸する事が出来たのである。第一大隊は、途中かなりの損害を受けて減耗し、また一部転属になってブインに残置したので兵員数がかなり減っていたが、大隊本部・歩兵四ヶ中隊・野砲中隊に再編成されて直ちに島の防衛位置に着いた。

大隊本部は、バンバシャイ海軍基地の近くの丘陵地に位置し、急遽、檳榔樹と椰子の葉で宿舍を建て、艦砲・爆撃に対する避難壕をつくった。そしてその付近を税所台と名付けた。

各中隊の配置は、敵の攻撃の主方向であると予想される南海岸と西海岸に重点を置き、南海岸には野砲中隊と第三中隊、西海岸には第一、第二、第四中隊が布陣することとなった。

戦況が緊迫しているので布陣後各隊とも極めて多忙であり、一刻を惜しんで陣地構築に励み、敵の上陸に備えねばならなかった。

元来、部隊が充分に戦力を発揮する為には（兵員）（装備）（糧秣）の三大要素が充足されていなければならないが、第一の（兵員）に就いては、ショートランド島防衛兵力は陸海軍合わせでも二千人に足らない。過去の例から見ても、米軍はどんな小さな島を攻撃する場合でも艦砲射撃と爆撃機の支援下、少なくとも一万人以上の兵力で上陸してきているので、数の上からは勝負にならない。それでも我々は大和魂で補おうとする精神的強靱さがあった。第二の（装備）の点は兵員に相応する銃砲だけであるが、弾薬については我々が交代する前の部隊が莫大な量を残置していたので、これは心強かった。

問題は第三の（糧秣）である。食料の枯渇ばかりは精神力や作戦で解決出来るものではない。

今は上陸した直後であって、一ヶ月程度は食い延ばしてゆける量を携行してきたが、最早食料の補給が全然期待出来ないとなれば、何時来るか判らない敵を待ち、いざその敵が来るといつ迄戦闘力を維持出来るか不安だった。

布陣を終わった各部隊が急遽為すべきことは、宿舎、避難壕作りの他、海岸線に敵上陸阻止の為の防御陣地構築、各部隊間の通信網架線作業、そして大変なのは食料対策であった。

先ず実施したのは、戦闘中は食料調達が困難になるので靴下一杯づつの米を非常食として分配各人保管とし、残余の食料は部隊で嚴重に管理、出来る限り長期間食い延ばしてゆく事とした。次に、部隊で管理する食料を二ヶ月間食い延ばしてゆけるように、その間の補充食料を陣地周辺で調達する、更に二ヶ月以降は手持ち食料が皆無になるので、その時期に対処する為に直ちに島作り、魚の燻製作り等を開始する、というのが食料対策であった。

したがって各隊共、毎朝点呼が終わると兵員の三分の二は構築作業に割り当て残余の三分の一度度を食料対策に割かねばならなかった。

我々大隊本部でも臨戦体制で食料対策に努力しはじめた。

しかし何といっても日本本土から直行して着いたばかりであり未だ現地に順応して生き抜いてゆける知恵も力も出来上がっていないので食料調達といっても実際には容易ではない。あたかも幼児を街に放り出して独力で食べてゆけというようなものである。

始めの頃は、海岸線にある椰子の実をもぎ落として、その果汁と果肉を補充食料に当てるのが精一杯であった。島作りの方は農家出身の兵もいたので、税所台の丘陵地の宿舎前に農園らしきものが出来上がってゆき、主として甘蔗の苗が植えられていった。私は国を出る時、誰かの助言で色々な野菜の種子を将校行李に入れて持って来ていたので忽ち役にたったが、何しろ日本とは氣候が全く違うので育つものもあれば全然成育しないものもあった。しかし甘蔗にしても野菜にしても、今から植えて果たして二ヶ月後に食べられるようになるのかどうか、又食べられるよう

になる迄に敵が上陸して来るのではなからうか等、畠作りをしながらも不安を消す事は出来なかった。それでも大隊本部は立地上恵まれていて、中隊の者が連絡のため大隊本部に来た時、農園を見て驚き且つ羨んだ。それは各中隊とも海岸の砂浜の直ぐ後のジャングルの中に宿舎を作り、畠を作るような土地がないので、比較的浅いジャングルで僅かに陽光がこぼれてくる猫の額の様な所を何ヶ所か探して甘蔗の苗を植え付けているので、作業が捗らぬ上成育も悪いらしい。

とにかく大隊本部では心細い思いながら食料対策は一番順調に推移していたが、大隊本部付近は連日日課のように敵機の銃撃を受け、その都度作業を中断して避難しなければならなかった。ガダルカナル島からブイン爆撃に来る敵機が、その往復の途中に海軍基地周辺を機銃掃射するのである。時にはブインを爆撃に行った敵機が、日本の激しい反撃のため爆弾を落とし切れずに、残った爆弾で我々を爆撃することも間々あった。

上陸後、一応の緊急対処も終わった頃、海軍部隊へ挨拶を兼ねて連絡に行った。

此処でも若い海軍士官が昼食を共にしながら、ソロモンの戦況、ショートランド島の状況などを教えて呉れたが、敵の来襲時期が急迫していることに驚くと共に、またしても海軍の食料の豊かさに感心した。今後の継続的情報連絡を依頼して辞去する際、土産としてウイスキーのボトルを呉れたので感激して頂戴したが、次に再会する時、返礼として渡す物を我々は何一つ持っていない事を思うと残念だった。

海軍部隊から大隊本部に帰隊すると悲報が待っていた。本部の有能な古参兵二名が赤痢の症状で相次いで死亡したという。

上陸後十日程たった頃から殆ど全員が激しい下痢をするようになったが、初めてマラリヤに罹ると下痢をする事を聞いていたし、それよりも、水が変わった故だろうと思っていた。

私自身も食事もとれず脱水症状で体力、気力ともに著しく衰えてしまったが、何とか頑張り通して回復する事が出来た。しかし、兵の中には既に回復も覚束無い症状を示し、軍医も匙を投げ

ていた者が数名いたのである。

南海第四守備隊としては此の島に来る迄に多数の犠牲者を出して来たが、大隊本部では初めての死亡者である。本部からやや離れた岬の茂みの中に頭を故国の方に向けて遺体を埋葬し、遺骨をとる為に、身体の一部を出来るだけ煙を上げないように注意しながら焼いた。

この頃から敵機の来襲が頻繁となり、激しい銃爆撃を受けるようになった。そして夜になると東南の方向海上に殷々たる砲声が轟きわたり、砲火が稲妻のように激しくソロモン海上を照らし出していた。

海軍の情報によれば、八月十五日、ショートランド島の直ぐ東南前のベララベラ島に敵が上陸を始め、現在島内と海空で凄惨な戦闘が展開されているという。

ショートランド島周辺上空でも、彼我壮絶な空中戦が行われる事がしばしばあった。いよいよ敵は目前に迫って来て、本部内も緊迫した雰囲気となった。

そんな或る夜、私は税所台の一番高い所にある対空機関銃座を見回っていたが突然敵機が西方から低空で進入して来るのが見えた。私は射手を押し退けて銃座に付き銃把を取り、敵機の前部に向けて曳光弾を連射し始めた。敵機も直ちに応射しながら、銃座目掛けて突っ込んで来た。

暫くは彼我向かい合つての銃撃戦となり曳光弾が飛び交った。敵機の銃弾が私の周囲に土煙を上げるが、恐怖感は無く、銃把を指がめり込む程握り締めていた。やがて突っ込んで来た敵機は頭上をかすめながら行き過ぎ、~~今度~~敵機の後部から射撃して来た。私も直ちに機関銃を反転して敵機の後部を狙うべきであるが、敵機が頭上を過ぎた途端に反転の勇氣を失ってしまった、銃座の中に頭を疎めてしまったものである。

また或る日、我々の頭上で彼我一機づつの空中戦があり、そして呆気なく終わった。敵機は煙の尾を曳きながら落ち、搭乗者はバラシュートで海上に落下、三十分程後に敵の水上演習機が飛来して搭乗者を救助してゆくのを目撃した。時たま、救助されずにショートランド島に泳ぎ着いて、

捕虜になる敵航空兵があったが、その都度ブインの軍司令部に後送していたので、その後の彼等の運命に就いては判らない。

捕虜を後送する舟便がしばらく無い時期があり、捕虜になった米航空兵を大隊本部で監禁していたことがあった。言葉がよく通じないので筆談も交えて調査書を作ったが、十八九才の航空兵は全く無邪気で、容貌も未だ少年のようであり、私には青い目をしたキュービーさんに見えた。捕虜という立場について、我々日本軍が考えているような屈辱感を全く持っておらず、「アメリカで許嫁が待っているが何時帰してくれるのか」と憂え顔で訴えて来る。私はチラと戦争の悲劇性を感じたが、部下の前で甘ったるい態度はとれず、捕虜を睨みつけた。

そんな或る朝、点呼の後で兵隊達が銃剣術の練習をしている掛け声が聞こえて来た。

「前へ、後へ、前へ、——突け！」指導しているのは本部事務所の松谷曹長の声である。そして兵隊達の「やーっ」と言う大声が聞こえる。私は宿舎から顔を出して見て「あっ」と驚いた。

捕虜が上半身すっ裸にされて木に縛られ、その胸の前に兵隊達の銃剣が光っているのである。

慌てて松谷曹長を呼んで聞くと、米兵に対する憎しみを強める為にやっているとの返事である。私は「剣先が胸に当たって怪我をさせぬよう充分気をつけてくれ」と言ったが、松谷曹長の返事に私自身、ぎくりとするものがあった。

後日その捕虜も無事に後送することが出来たのであるが、後送の後は如何になったものだろうか、果たして許嫁と再会する幸せがあったのだろうか。

その頃には未だ日本軍の優秀な戦闘機（零戦）約七十機がブイン周辺数ヶ所の飛行場にあつて、敵の爆撃機を護衛して来る戦闘機と空中戦を行ったが、日本軍機搭乗者の優秀さもあいまって日本機が撃墜されるのを見ることは希であった。しかし連日の来襲のため次第々に消耗し、間もなく三十機程になった時点でラバールへ引き上げてしまい、我々の上空は完全に敵に制せられることになるのであった。

銃爆撃は日を追うにつれてますます激しくなつて行つた。

もう敵機を追い払う友軍機も殆ど見ることがない。

海軍の高射砲陣地からは敵機の来襲毎に一斉に火を吹くが、未だかつて戦果を挙げた事はない。爆撃機は高度が高過ぎてとどかないし、戦闘機は低空を高速で飛ぶので当たらない、所詮高射砲は脅しに過ぎなかった。そののみか、老朽高射砲なので閉鎖器から爆発ガスが漏れ、射手がしばしば重傷を負う有様だったらしい。

海軍では避難壕の出入口に爆弾が落ちて、かなりの兵が爆死したという。

敵は直ぐ目の前迄来ており、何時我々の島に來襲するか判らぬ時期に來ているが、有利な状況は何もない。

せめて玉碎する前に、敵の一兵でも多く倒す事が我々の任務であると覚悟を決めざるをえなかった。ので、本部の兵達にも軍人精神の、最終の心構えを徹底教育しておく必要がある、努力した。

或る日、宿舎の中に本部の兵を集めて教育をしていた時、敵機の來襲があつた。あわてて避難壕に入り、爆撃が終わつたので再び宿舎の中に戻つて驚いた。我々が座つていた場所にぽかっと大穴が開き、不発の爆弾が床下に突き刺さっているのを見て肝を冷やした。

九月の終わり頃になつて、妙に敵機の姿を見る事が少なくなった。嵐の前の静さを思わせるものがあり、不気味であつた。

それでも兵達は、この静かさの中で、忘れていた事を思い出したように身の整理を始めたり、故国宛の便りを書く者が多かつた。兵は便りが国に届かない事を知らない。

そんな日、大隊長に呼ばれた。

「小林見習士官、一寸静かになつたが上陸以來大変だつたな、君は基が出来るらしいが、鬼の來ぬ間に一番やろうか」その時大隊長と初めて基をうったが、力量は同程度であつて、以後ずっと私が常先でうつ事となり、何百回うったか数え切れない。大隊長にしてみれば、絶望的な戦況の中での

ストレス解消の為に、私が恰好の相手だったのかも知れない。後日前線で将校が次々に倒れ、その補充に困っている時でも、私を手元から離すことは無かった。

銃爆撃が少なくなったので、ブーゲンビル島の連隊本部から連隊副官が視察に回って来た。

たまたま連隊副官も墓が好きだったらしく、私が相手をするように大隊長から命ぜられた。但し絶対に勝ってはならぬと命ぜられたのには閉口した。私は手心を加える事が出来る程の技量をもっていなかったので惨敗する結果となったが、結構、連隊副官はご機嫌で帰って行った。

二三日して、連隊副官から連絡があり、ラバールに出張することになったので随行するように言われたが、これは数日後、状況の急変のため中止となった。

十月に入るや否や、再び敵機の来襲が激しくなり、夜は前方海上で砲声と閃光が絶えなかった。海軍の連絡によると、いよいよベララベラ島の守備隊が全滅寸前となり、撤退を開始したらしい。そしてベララベラ島沖で日・米の艦隊が激突しているそうである。

ベララベラ島が陥ちると次は我々の島に上陸して来るのは必至である。

海軍では敵の予想上陸海岸であるショートランド島の南海岸中央のマサイに、軍艦から取り外した主砲二門を据えつける作業をしたそうである。マサイ海岸には南海第四守備隊の野砲中隊も布陣し、その前方一キロ程対岸のモグサイア島には第三中隊があり、さらにその前方十キロのモノ島に海軍が監視部隊を置いている。したがって主方向の南海岸は、敵の上陸に対してかなりの抵抗が出来るであろうが、何と言っても千名程の兵員であるから、一万以上の敵上陸軍を海岸線で防ぐのは至難であるに違い無い。歩兵ばかりの西海岸は、南海岸と比べてはるかに手薄である。

とにかく可能な限りの防衛体制をとり、将兵は此処を死に場所とする決意を固めて一日一日来襲に備えていた。

その朝、空が漸く明るくなりはじめた頃、突然、激しい機銃音がして我々は叩き起こされた。東の方角から敵機数十機が急降下して来る。

海軍基地、大隊本部周辺は轟音と土煙に包まれてしまった

機銃掃射と爆撃が、繰り返し繰り返し、執拗に反復される。

やっと敵機編隊が遠ざかって行ったので避難壕から出てみると、本部宿舍や事務室は後形も無く装具備品類が無残に散乱している。慌てて散乱した兵器類、書類等、重要な物品を収集している最中に、二回目の編隊が来襲し、今度は海軍基地を集中的に攻撃している。

これはもう只事では無いと感じた。海岸線防衛陣地の各中隊の状況を把握し度いが、通信線がずたずたに切断されて、指揮系統が壊滅してしまっている。大隊長が顔を真っ赤にして、早く各隊と連絡を取るように怒鳴っているがどうにもならない。

取り敢えず各隊に伝令を派遣すると共に通信線の修復を急いだ。

伝令を派遣してかなりたって各中隊の方から状況報告に飛んできたが、大隊長は報告が遅かったことを大声で叱りとばしている。

報告によれば、各中隊の方には銃爆撃が無かったらしい。しかし大隊長は敵の上陸が近いと判断して、各中隊全員が常時海岸線陣地について、敵の上陸に備えるよう命令を発した。

午前中は間断無く海軍基地周辺の銃爆撃が繰り返され、ファイシー島にある航空機の燃料倉庫が爆破され、ガソリンの入ったドラム罐が悉く大音響と共に爆発してしまった。

正午頃になって、敵機の来襲が暫く途絶えたと思った時、南の海上に敵巡洋艦四隻が不気味な姿を現した。マサイに据えつけられた海軍の砲台からは敵の艦砲射撃に先だって巡洋艦に対する攻撃を始めた。我々は、敵の巡洋艦に命中して爆煙が立上がるのを、祈るような気持ちで見守っていたが、無念にも弾着が届かない。

その中敵艦から発射したらしく、マサイの上空のかなり高空に、一発の赤い煙を出した信号弾が打ち上げられ、やがて各艦何十門の艦砲が轟音をあげ、一斉にその信号弾の煙に照準を当て発射し始めたが、その弾着が一点に固まってきたかと思える間にその一点が急下降し、マサイの砲台付近に

全砲の集中射撃を開始したのである。勿論マサイの砲台からも射撃しているが弾が届かない。

敵は友軍砲の射程距離外に止まって猛射してきているのである。

やがて敵艦砲の弾着は束になったまま南海岸線に沿って移動し始めた。マサイ付近から先ず西の方へ移動し、第一中隊陣地付近に物凄い爆煙が上がっている。そして次第に東に移動、再びマサイを砲撃、さらに東に移動していいよ海軍基地、税所台に砲弾の束が落下してきた。

艦砲数十門の威力は言語を絶するものであった。

私は最初自分の個人居室で砲撃の恐怖に耐えていた。その居室は丘陵の、海側の反対側に半地下式に建てられた避難壕と兼用のものであって、海側から受ける艦砲射撃に対しては大丈夫と思っていたが、ヒュルヒュル唸ってくる飛来音とその後の爆発のすざましさに恐れをなして、大勢で避難している本部事務所の壕に走り移った。

敵巡洋艦からの艦砲射撃はかなり長時間続き、われわれの心胆を寒からしめたが、上陸して来る兆しは遂に無く、砲撃が終わるとふたたび南の海上を視野から去って行ったのである。

砲撃が終って、居室に戻り、驚いた。

居室は完全に破壊されており、壁に掛けていた小銃の銃身も曲がっている。そして艦砲射撃というものは、反対斜面にいても決して安全なものではないという事を初めて知った。

午前の爆撃でずたずたになり、やっと修復しかけていた通信網が再び用を為さなくなった。

漸く各隊と連絡がついて被害状況を聞くと、元々大した装備をもっていないジャングル部隊の事なので、大きな被害は無く、何よりも安堵したのは兵員の損害が少なかったことであつた。しかし被害が少なかったのは上陸軍を伴わなかったからであり、若し艦砲射撃と共に何百隻の上陸用舟艇に一万とか二万とかの大軍を乗せて一斉に押し寄せて来ていたならば、避難壕に避難するどころではなく、あの猛烈な砲撃下で全火器をあげて海岸線の防衛に死闘しなければならぬので、生残る者の方が少ないに違いない。

それにしても、このジャングルの島に於いて砲爆撃下に通信網が破壊されてしまうようでは、今の位置での大隊本部は実戦時に役に立たない。夜になって、大隊長は急に大隊本部の移転を言い出した。大隊本部を各中隊陣地の略中央付近の前線に移し、上陸軍を迎撃する時、或いは上陸後の敵に対してゲリラ戦を戦う場合にも、直接指揮が取り易いようにすることになった。その位置は我々以前の部隊の陣地跡で、南海岸から西海岸への曲がり角の海岸から二百メートル程入った地点にある、鬱蒼たるジャングルの高台であった。

何分、敵は何時攻めて来るか判らない情勢にあったので、大隊長は翌朝早々に、約十名程の幹部と共に小舟に乗って先発して行った。

そして私は残余の大隊本部要員を引率して、その日中に陸路移動することになったが、与えられたのは簡単なメモのような地形図だけである。ジャングルの島では舟の移動は簡単であり、土民達もカヌーにのって行き来しているが、陸路の移動は極めて困難である。しかも地図らしい物も無く地形図を頼りに出発しなければならなかった。

兵達は朝食後直ちに出発準備にとりかかった。

本部事務室の書類、備品等は少ないように見えていても、いざ梱包するとなるとかなりある。

兵隊達個人の所持品は、兵器、装具の他たいした携行物はない。しかしたいした物が無いだけに何でも持って行きたがった。

困ったのは農園の作物だった。八月九日に上陸してから丁度二ヶ月、内地から持って来た食料は非常食以外殆ど底をつき、いよいよ農園の作物と野生の収穫物に頼らねばならない状況になりつつあった。日本と違って此の地は高温多湿で作物の成育は驚く程早い、それでも一部野菜の他は、これから先が収穫期に入ってくる。兵達は、未だ小指程にしかない甘い甘蔗も全部掘り起こして持って行こうと主張する。苦勞して育てた彼等だから、その気持ちはよく判る。

少なくとも午前中に出発しなければならないので、僅かの収穫に時間を費やすことは許されない

さりとて捨てて行くにはあまりにも惜しい。緊迫した状況下だけに苦慮した結果、既に成育している一部野菜だけは取り入れ、残余の作物はもう一ヶ月間収穫を延ばし、その間、病後衰弱している兵二名を番人として残すこととした。

あれやこれやで、出発は予定よりかなりおくれた。

まるで旅廻りの芝居小屋の移動のような恰好で、急搭えの荷物を担ぎ税所台を後にしたのは午後一時を回っていた。